

## 「受賞者の言葉」

牧田 東一

本書は東京大学大学院総合文化研究科に提出した博士論文を修正し、また新たに 2 章を追加したものである。テーマは 1950~70 年代初めのアメリカのフォード財団のアジアでの活動、特に開発援助に焦点を当てた戦後開発史の研究である。

アメリカの民間財団に関する国際関係論の研究は少なく、日本においての活動は知られていたが、本書で取り上げたインド、インドネシア、ビルマでの活動はほとんど注目を集め未なかつた。しかしながら、国際開発の初期の段階におけるアメリカの民間財団の役割は重要である。本書はフォード財団の本部に保存されている一次資料を網羅的に収集して、それらを同時代のアメリカ=アジア諸国関係の中で読み解くことを通して、フォード財団がアメリカ政府と時には協力し、時には単独で国際開発をこれらのアジア諸国で強力に進めていったことを明らかにしている。

アメリカがほとんど単独で進めていった国際開発の初期段階において、開発戦略の上で重要な点はそれが冷戦戦略とリンクしていたことである。フォード財団が力を入れたインド、インドネシア、ビルマは非同盟運動の指導的な国々であり、アメリカとソ連の援助競争となったこれらの地域が国際開発の主戦場であった。また、中国共産党が農村を支配することで国共内戦に勝利したことへの反省から、アメリカは農村開発に力を入れ、工業開発を主張するソ連とは好対照であった。日本においても農地解放を推し進めたように、農村の貧困に対処することが、共産主義の侵入やファシズム・軍国主義の再度の台頭を防ぎ、民主主義陣営を守るための鍵だと考えていた。

アメリカがアジア地域の近代化を特に農村で進めようとしたとき、モデルとなったのは国内のニューディール改革であった。開発の現場で主導権を持っていたのは、ニューディーラーと呼ばれる人々であり、大恐慌で荒れ果てたアメリカ農村の立て直しのために様々な改革を行ってきた人々である。それはおのずとアメリカ的秩序の海外への輸出であり、ある意味では押し付けでもあった。

フォード財団はアメリカ国内ではリベラル派と位置付けられる財団であり、ニューディーラーもアメリカの政治文脈では左派の人々である。彼らがアジア諸国でカウンターパートとして選んだのは、日本では英米派のリベラルな人々であり、アジア諸国では民主的な社会主義者であった。インドではネルー、ビルマではウ・ヌ、インドネシアではシャフリルの社会党の人々であった。ここにはイデオロギーによる提携があり、フォード財団は強いイデオロギー性を持っていた。国際開発はアメリカではリベラル派の人々、アジア諸国では社会民主主義的な人々の連携の上に始まったのである。

戦後はアメリカ帝国の時代であると言われるが、リベラルな帝国であり植民地を持たないアメリカが自国の望む自由民主主義的世界秩序を構築するときに、これら諸国が望ましい社会秩序形成には、アメリカ国内でも研究や教育、また社会実験などで秩序形成に大きな

力を持つ大型の財団の役割は重要であった。フォード財団はリベラルな帝国アメリカが「自らに似せて世界秩序を作り変えようとする」際の巨大なソーシャル・パワーであったのである。

## 略歴

1978年 東京大学教養学部基礎科学科卒  
1980年 東京大学教養学部教養学科文化人類学分科卒  
1980年～2002年 財団法人トヨタ財団国際部門プログラム・オフィサー  
　　インドネシア、マレーシア、ネパール、ベトナム、カンボジア担当  
2017年 東京大学大学院総合文化研究科（国際関係論）修士課程入学（仕事と兼務）  
2002年 東京大学大学院総合文化研究科（国際関係論）単位取得退学  
2002年 桜美林大学国際学部准教授  
2006年 同教授  
2006年 学術博士  
現在 桜美林大学リベラルアーツ学群教授、サービスラーニングセンター長

## 主要業績：

2025年 『リベラルな帝国アメリカのソーシャル・パワー フォード財団と戦後国際開発レジーム形成』 明石書店  
2023年 A Historical Study of Creation of the Official Development Assistance Regime:  
　　the Diplomatic Struggle Between War Winners and Losers in Early  
　　Period of OECD-DAC, 1960-1965, 桜美林大学紀要社会科学研究第4号  
2013年 『国際協力のレッスン—地球市民の国際協力論入門』 学陽書房（編著）  
同 共著『国際文化関係史研究』 東京大学出版会  
2007年 編著『プログラム・オフィサー：助成金配分と社会的価値の創出』 学陽書房  
同 共著『民間助成財団イノベーション 制度改革後の助成財団のビジョン』 助成財  
　　団センター  
2006年 監訳、ジョエル・オロズ著『助成という仕事：社会変革におけるプログラム・オ  
　　フィサーの役割』 明石書店。  
2005年 平野健一郎監修『戦後日本の国際文化交流』 頸草書房（共著）  
2001年 「民間助成財団とNGO」、若井晋編『学び・未来・NPO：NGOに携わるとは何か』、  
　　新評論  
1991年 「日本社会の変革とその新しい担い手としてのThird Sector」 第8回高橋亀吉賞  
　　優秀作、東洋経済、1991.11/16号。